

沼尻 絳一郎 編輯  
西南太平記

十一号

下

30

25

20

15

10



A434

14

西南太平記十一編卷之下

東京 沼尻絰一郎編輯

第廿二回

熊本舊知事城中へ酒と贈る  
并逆徒大矢野服部小迫

既すに四月二十六日正午しゅうごに至り西郷陸軍中將しやうごうの  
東京とうきやうと發足はつそくして西京さいけいへ出帆しゅつぱん小あり其そのの不在ふざい中  
陸軍少將井田讓りくぐんしょうじやういわたじやうの代理だいりるより又鹿兒島かごしまの兇  
徒とが其縣下そのけんげふかいと官軍くわんぐんと戦いくさひいハ斬きるまく

西南太平記

十一編下二

48-7777



撃破せられし彼の日向地方へ赴き西郷以  
 下の動靜如何なる本縣不歸らんとするに  
 猶縣下不備へらるるの兵あれを反覆して進取の  
 初志をまゝ日向豊後の間不試とて決死の勇を振  
 はんも計るべからず傳へ聞く鹿兒島の兇徒も熊  
 本縣下よ進入より同縣下の士族彼の神風  
 連の餘黨などが暴徒不與せし中ふて其名も  
 聞えし池邊吉十郎が履歷を聞得たるより

左ふ掲載たり

傳云池邊の熊本藩の平の士族ふて家禄二  
 百石と食と維新の後ち八十二俵に減ず始  
 りめ宗右工門と稱し吉十郎と改名す父を  
 池邊次郎助といひ種子島流の砲術師  
 範役たり吉十郎が十二三歳の頃同年の惡  
 少年某と戯し竹槍を以て戦ひ過て吉十  
 郎の右の眼と突きて遂に隻眼となり長き



るに及んで砲術と工とみ一類付ふて  
 よく強薬の二百目銃とうち左眼みて巧に  
 命中るも見る者奇なりとす十七八歳よ  
 り時習館の寄宿生徒となりて深く程朱  
 の學とあきらめ専ら經書と講習して詩文雜  
 博と厭ひ學風尤も固陋なり戊辰の役み肥  
 後人の多く徳川氏と志と傾くる者多きに  
 吉十郎も學校黨中佐幕論の一人みて會

桑の天下の誠忠人臣の龜鑑ならん肥後も  
 宜しく是も同して千載の下汚名と青史み  
 賄すべからざるを論じたるが若松城の陥  
 入り奥羽全く降伏と聞より大に落膽し是  
 より攘夷論と建てその黨と結び実學黨  
 の米田横井の諸氏と相軌りて程なく文  
 武監とあり又少参事み擢せられしも翌  
 年免ぜらるるより三年の夏鹿兒島に遊學

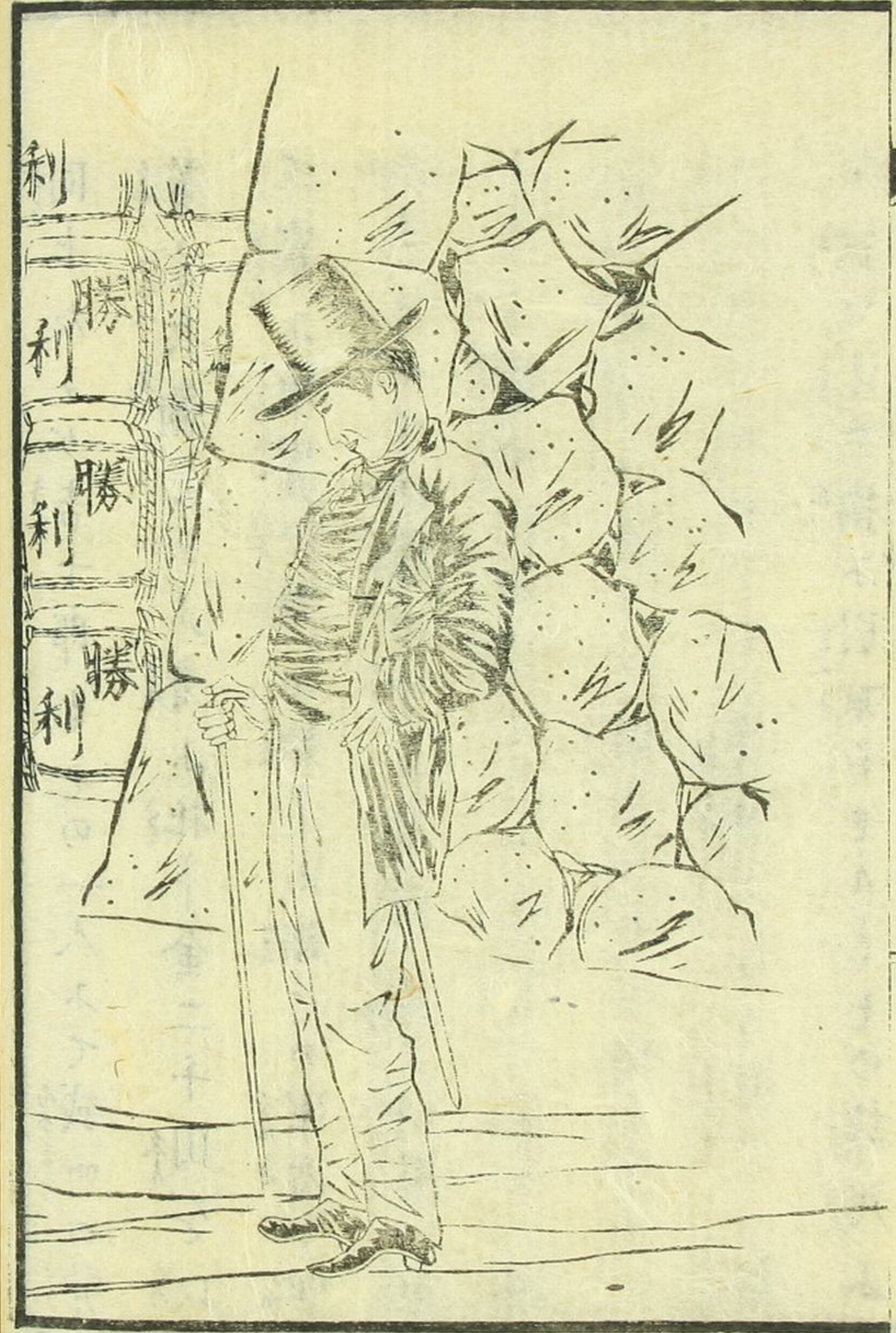


して遂に西郷又結び同所は幽ること凡そ二  
 年間をかりまうり一ヶ池邊の黨の西郷の謀  
 叛を真せし取て此度の一拳は響音應せし  
 類にあらず事あり我待て發せんと豫て思  
 惟せしみて有りけん吉十郎の鹿兒島を遊  
 學して深く西郷又結び歸て後ち佐賀の乱  
 發るの前石井竹之助山田平蔵等が竊に熊  
 本に來り同盟を促したる時二百人をりり

同トたるが吉十郎もその一人みて或町の骨  
 董才兵衛と云ふ者も托し金二千圓を以  
 て竊し甲冑刀槍と始とれ総ての軍器を買  
 入をさせて土藏の中は蓄積屢々同盟を會  
 して土藏中に密議せしが佐賀の忽ち又鎮  
 定し鹿兒島もまた應ずべくもあらざるに  
 大は望を失ひしかば買集めたる軍器の類  
 を彼の才兵衛も引取らせんとその談判も



熊本の舊  
知事城中  
へ清酒を  
贈る





及び一才兵衛の天野屋の古轍を踏男  
 小もあざざりけん彼是と拒と一と遠又嚴  
 一くも掛合兼く遂に品を才兵衛へ引取  
 らせ十ヶ年賦ふ代金と戻す約定とあり  
 一が此事より後ち又苦情と醸一才兵衛の  
 縣廳へ訴一吏あり一が受理せられずとて  
 海鎮臺へ池邊吉十郎が不軌を謀る由  
 と言ひ立たまるとさう証拠も無きゆゑ才

兵衛の発狂せしとて許られなれ是より罷免  
 池邊の玉名郡横島に住その村の学校教師と  
 あり多くの子弟を教授せしゆ熊本小  
 ての深く信ずる者もあけもとも玉名郡中の  
 人望ハ一池邊又歸せしゆ西郷黨起り  
 ぬと聞くとより血氣の壯者を煽動しく儲  
 こそ加擔したりといふ

亦熊本の舊知事細川護久公の戦争中の南の



関ふ滞留さきて頻り士族を説諭され又近郷  
 の窮民共へも多くの米金と恵まれ一が同縣  
 下北岡邸ふハオより息女が居られ一が此  
 地の兇徒の本陣より一也立退り一は行  
 ききくハ何れも戦地よりハケ所まを轉居さ  
 れ斬く四月下旬北岡へ歸らまやの頃舊知  
 も同所へまいられ縣下の窮民へ金二万四  
 千圓の將校へ酒二百樽と贈られたり又熊本  
 城  
 中  
 新  
 中  
 傳  
 へ  
 四  
 れ  
 り  
 大

城中あり久しく逆徒と支へて戦はれ一ハ  
 新動功の名士あり今度鎮臺の参謀長  
 中佐資紀の履歴を聞ふ鹿兒島の人あり  
 傳云榊山氏ハ本姓を橋口と云ひ榊山家  
 へ養子とりり戊辰の役ふハ鹿兒島藩兵  
 四番隊の長あて白川口へ向ひ日々劇戦さ  
 れ一が白川の奥羽二州の咽喉の地あて速  
 りよまの地を畧せまを官軍ふあいて大

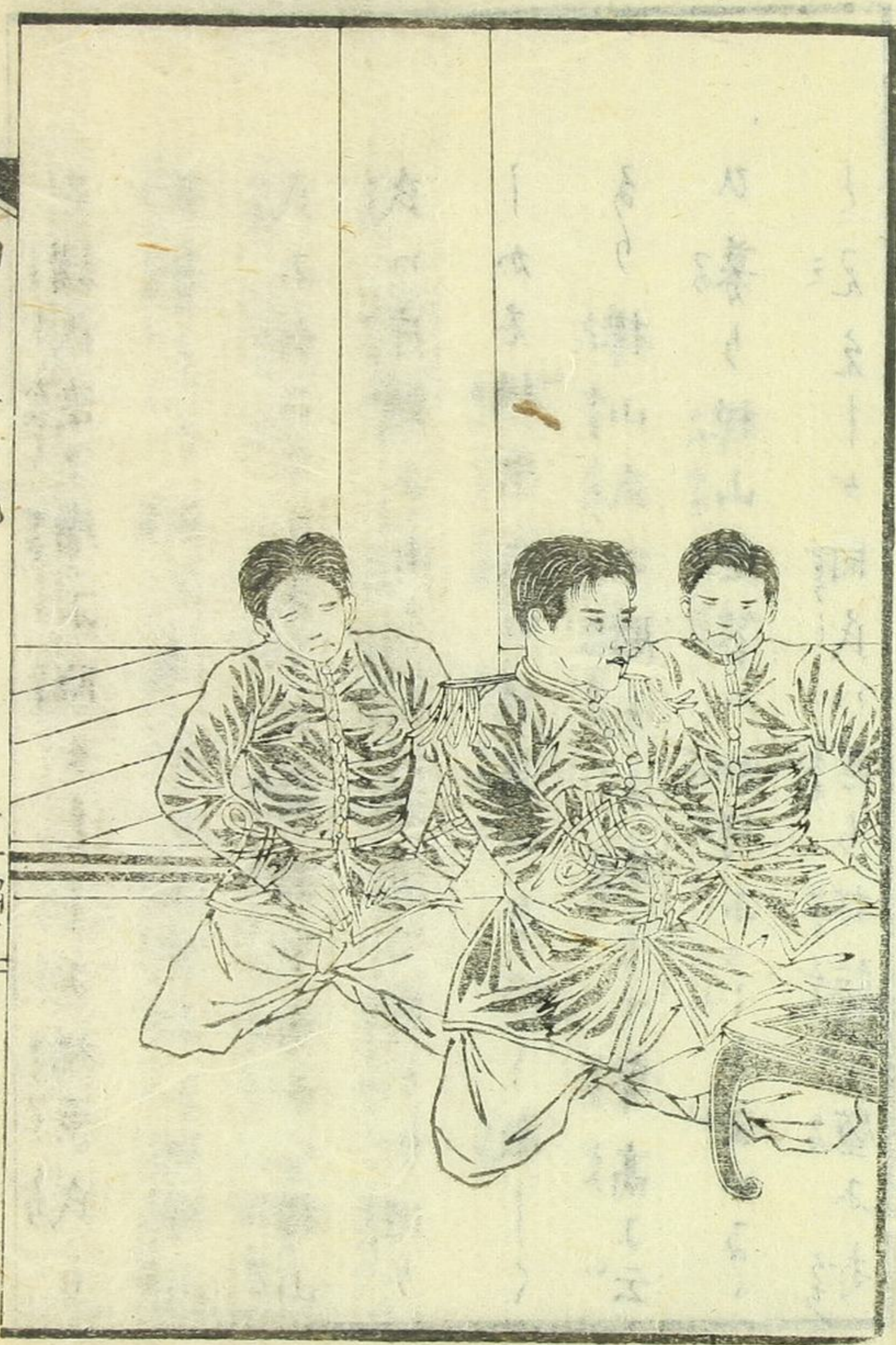
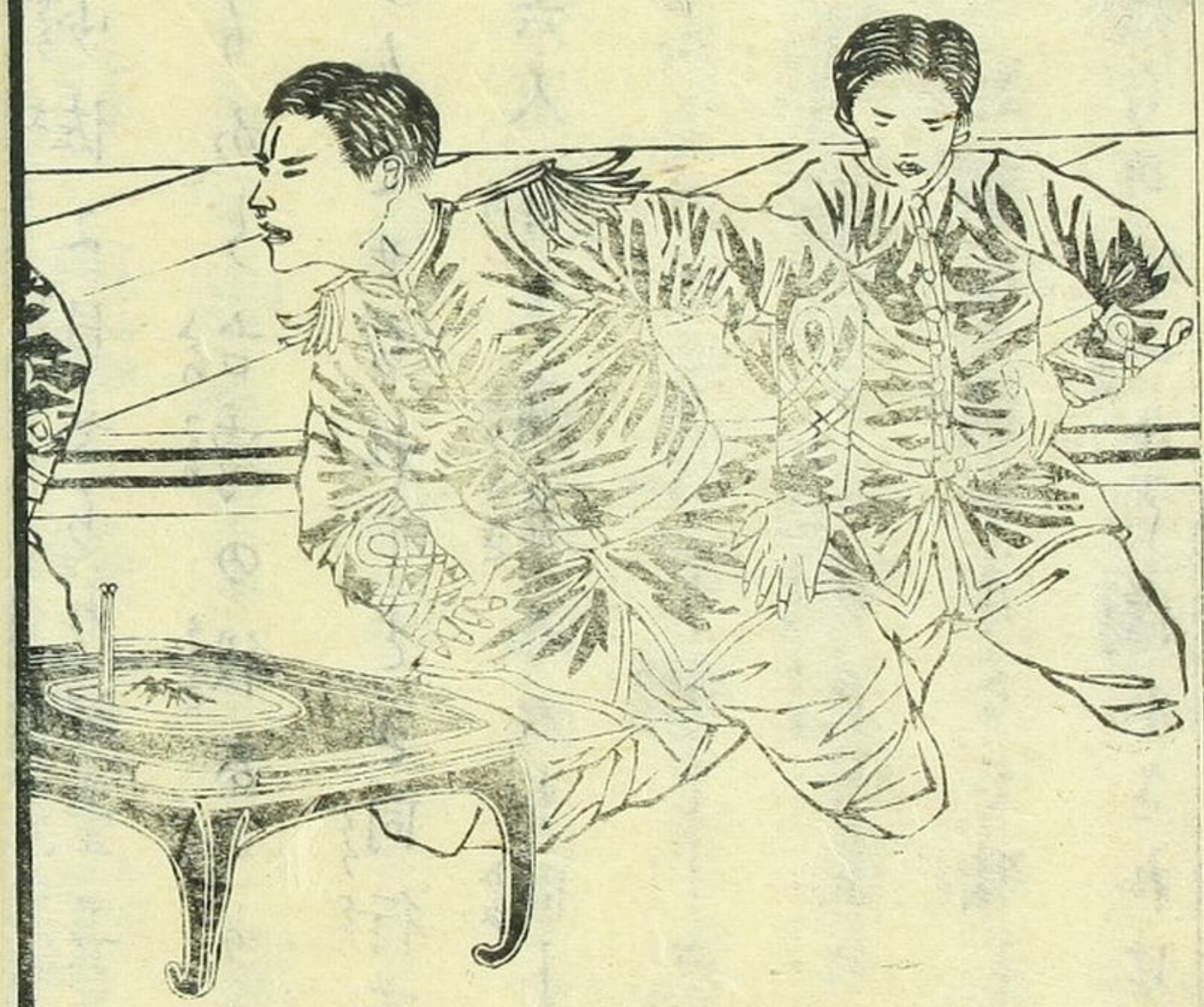


いふ進路の障碍ありと故種田少将の時ふ  
 六番隊の長として向われしも足をうとれ  
 樺山も又隊兵を擢んで戦ひ散弾の為  
 不類と貫ぬかき一が勇氣屈せざるの役  
 をてのち鹿兒島の大参事となり藩政  
 改革のとき小加世田の地頭となりて此  
 の郷のこのとよと服せしめられし等そ  
 の成跡尤も多く同縣に鎮臺分營をお

りしとた少佐に任せられ鎮臺長と  
 なるれしよりかゝ台湾の役ありし  
 東京に歸らんとせられしとき同行すべ  
 き武官も五六人あり高寄五六も同トく  
 歸京せらるんとのことふし暫らくの逗  
 留中元鹿兒島縣令の大山氏が此の人  
 々をまゝいりて別宴を開かんとして殊に閑  
 静なる地を撰らび谷山ふし催わされけれ



樺山中佐  
榎原氏と  
議論を





を諸氏追々席ふ臨まき一は榎原氏も  
 来會一は未ど酒肴も出ざるさる榎山  
 氏ふ向ひてあきりに議論と為まを榎山  
 氏の片頬ふ打ち笑のそみて聊るも廻り  
 一かを榎原氏の議論のまに激しく  
 ろり榎山氏の膝元は迫りて聲高ふ云  
 ひ暮り榎山返答の如何ふと云はる  
 と見え一は同氏の忽ち杯盤を壁ふ打

つけ有り合ふ火鉢と手玉ふ抹りなど  
 暫らくの操合ひふ争そひも其の夜の  
 うちと解けたるは一時の戯れるが榎山  
 氏が沈毅の氣象と見え足きりと夫  
 ろり征臺の役を歴る朝鮮へもあむくれ  
 その後ち熊本は神風連の變起り榎田少  
 将害ふあはき一は同縣出張を命ぜら  
 れ乱後の所置とる一はその終同台の参謀



長し〜往在され遠し此の度の籠城も  
およむき〜が西郷隆盛も榊山氏此の城  
みあるを以て憂へど〜けん同氏の西郷  
が大将の名ありとして恣に兵士を率ひて  
管下と通行するを傍觀するの理あらん  
や通らるべく〜通りて〜よと以の外  
怒りあ〜勇氣の始終一徹ふして五十  
餘日の籠城もよく忍耐られ〜功勳の

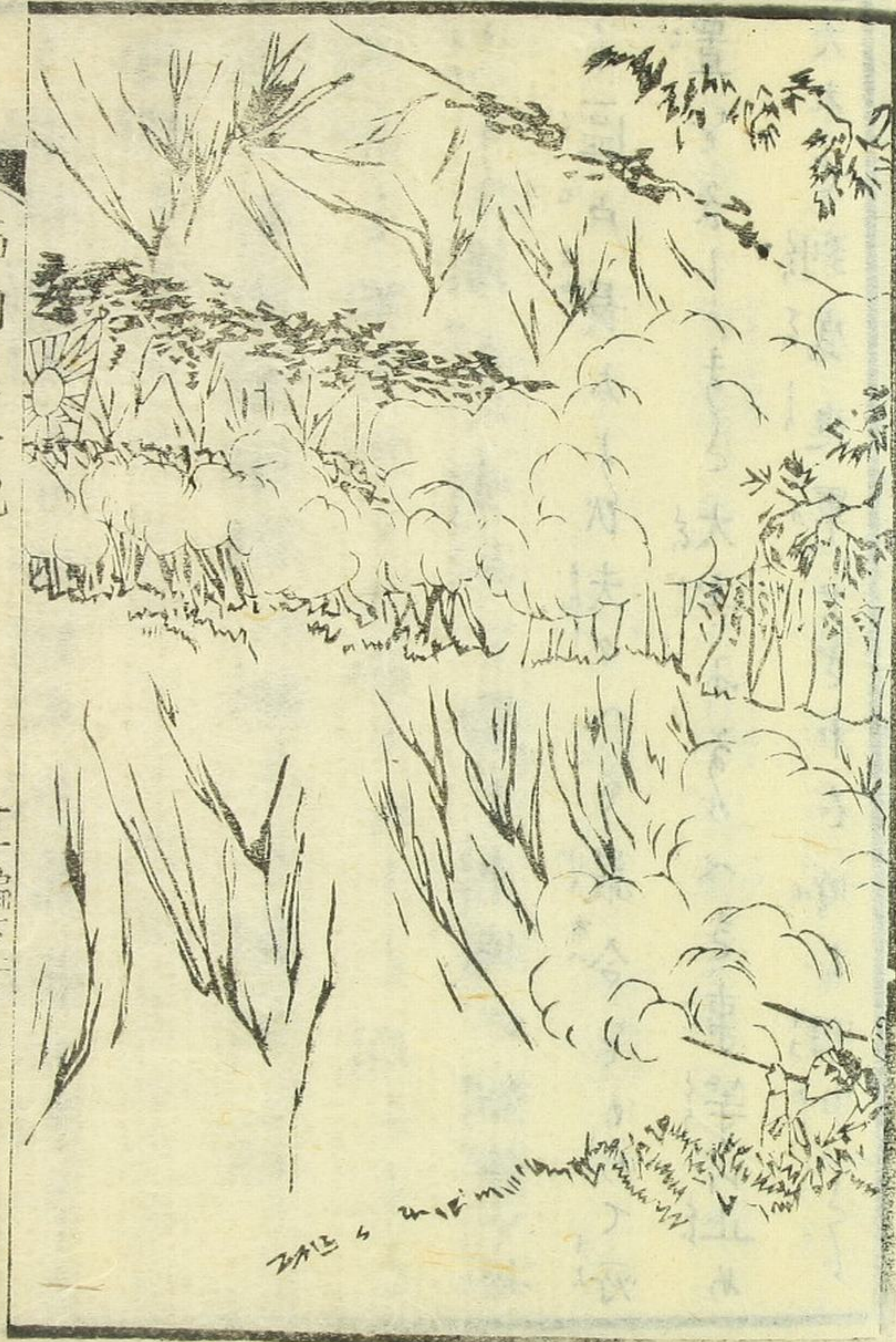
古今ふ類ひ少かるべし〜  
備中逆軍もその後矢部の山中より四面皆  
山岳ふて南面の一方より〜で進軍為しが  
要害の地理も引籠り再拳の用意をなす  
ふ抑此の地たるや東の阿蘇の山脈も連なり  
東南の日向高千穂越るなり然れを官軍より  
無暗よ〜攻ふゆゑなりが〜けきを諸将相議  
して云ふ先づ敵情の如何を探り而して後



小宜しく軍界を定むべしして晝夜次ひ又斥  
 候兵と出しその動静と探知せしむるは則ち  
 逆軍も四月二十五日をりり悉く矢部地方  
 の固めを引揚げマミ原より人吉にゆるる街道  
 ハマミ原と去ること五里半胡摩山とゆるりこ  
 ろよ兎哨兵を置き夫より人吉までの間二十里  
 餘ハ沿道村々ありとるまを多少の兵士と備へ  
 人吉も逆兵充滿晝夜の別なく番官等と

製造一同所を根據とし都の城大口の地理  
 小據り兵氣を養ひ又も大官軍と抗敵る  
 さんと企てたり此の人吉の城下の數千の兵  
 馬を容るの地あり人戸も随少と是れ  
 四月二十六日鹿兒島出張の官軍ハ春日  
 筑波籠驥清輝高雄テイボールの諸艦と陸  
 兵巡查とも凡そ七千餘人着港し総兵恙  
 なく上陸し直み元鹿兒島縣七等出仕る





人吉の炮  
 壘小兩軍  
 大激戦





る右松祐永その他松本今藤菘田等をして  
捕縛すと

蓋し鹿兒島縣管の頻り又嚴令を下して

出兵を取り討らひ居りたりと己より

夫より諸方へ哨兵を置き兇徒の動静を探

り區戸長および夫々へも嚴令をとりて所

置をなすしまた大害ふるるべき事等の止め

たれど到底進軍せざれを埒ち明申さう

れをばさるゆり又二旅團の兵を當地へ所廻

ありたり右着のうへ都の城あしび又大口

筋へ軍をすめ右のうへ二大隊をらぬ

阿久根を通行せよ入気も折り合ひ申す

べししりふ

亦熊本舊知事細川護久公の東京今戸

の邸に元家從を勤むる服部栄助の弟に

服部藤九郎といふは熊本縣下中坂清



正院前しやういんまへに住すまる本年こゝろ二十二歳さいの壮士じゆうしなれど  
 思慮しりよふくくして文学ぶんがくふよび武術ぶじゆつよりの道みち  
 秀ひいでたもを同年輩どうねいの壮士等じゆうしらの厚あつく敬けいして  
 親陸しんりくとむすぶもの多おほきよ鹿兒島かごしまの暴徒ぼうと  
 等らが縣下せんかへ乱入らんまふせ一日いちにちより人のまゝるも  
 あどやうあらず甲乙こうえつの暴徒ぼうと又應おうたり或あるひ  
 何某なむがも同盟どうめいせいと日毎ひび又聞きさへ胸むねやす  
 かろず藤九郎とうくわうの引籠ひきこもりて様子ようす如何いかと思おもふ

うち不舊知事ふきうちし公こうより縣下せんかの士族しぞくへつとさせ  
 たる告諭書こくごんきんたるたをこれに寫うつして  
 まろろ又志こころをすはもくろろざり茂固もくくして  
 常つねに親おやしき朋友ともあて絶とえく面會めんかいせぬをう  
 不義ふぎとあひんずる閑居かんきの門かど藤九郎とうくわうどのち居ゐ  
 やるう久ひさく對面たいめんいとさぬがと刀やいばを提さげて入い  
 り来るは是こゝろるん藤九郎とうくわうが叔父おじありて大矢野おほやの  
 を始はじめとして親戚しんせきのその二三二三人にん各座席かくざせき



由定まきと大矢野の進と寄り借藤九郎  
 主しう聞れよ我が甥るがら一器量ある  
 其方も今度思ふ仔細うあき有れを味  
 方よつけんと存むるゆゑ推忝しうしたるま  
 りよりや否やのあるまどきやと裏問かく  
 れを藤九郎はうるづきつ容をあうため答ふ  
 るやう柳薩士が當縣下へ乱入しうしたるその  
 日より鎮臺兵の城よ據り寄手い山鹿及び

田原坂の險岨と守る兎徒等と日毎の戦ひ  
 間断るくし加ふ死をかくりぬ激戦に  
 至りてハ傷者の月のも尤も多しと聞ふよべり  
 味方ふささるその攻口の先りる何方への思  
 召し未と去ひ終らざるを打ち消して官軍へ味  
 方しハ此の大矢野の奨めハせぬぞ今日前又薩  
 州より討つて出く威勢轟く西郷氏の味  
 方とらんる官軍勢を追ひ拂はんず我等が





服部藤九郎叔父の  
暴論をきく





所存既小縣下の士族も多分の同意ありそ  
 の由るハ彼の西郷氏の人望と云ハ且つ武略と  
 ハ頼む甲斐ある暇大將たるを如何よく  
 と説諭すを黙然として聞居たる藤九郎ハ  
 吐息をつきヤ叔父への所談口とも思ひま  
 らせず一言うる西郷氏何程勇膽人望ありつる  
 とも既又順逆の道に踏迷ハ王師又敵する無  
 道の戦争なり敗滅まさし速かりんや大義名

分と辨へたらんこそ武士の本意殊も旧知事  
 公の告諭書あも苦し逆軍に所加擔るら  
 ば早くおさうろとひるがへされよ假令屍ハ戦場  
 さらすとも逆徒の名を蒙るハ先祖へ  
 たへしても第一の耻辱ふて候べしと義氣鏗  
 石と説諭されけれを大矢野以下ハ目配をせし  
 て刀追取り詰寄せて左様ある論議ハ聞く耳  
 持ぬ我等を始トめ親類一家よりくるま



同意せざるものゝ因て今此期ふふよ味  
 方とせむとて其終は捨置がとき此の場の仕  
 合せ違て拒まを卒門出の血祭覚悟しやれと  
 迫ると藤九郎押し止めさるる思ひ込まれし  
 うへりうの最早是非よ及をぬふ諫め申すまど  
 身不肖るが藤九郎も仰せぬしどがひ打ち  
 たるるといふよぞ大矢野莞爾と打笑と夫でこ  
 そあを我が甥えれ猶も委細の我が宅に於て

緩々申し談せん必ず今の一言と違へまひせ  
 と引連れて帰ると見送りて狭き書齋もんの廣  
 く逆徒み與せぬ潔白の同意と見せて叔父と  
 べかへし札の硯取り下して遺書一通と書き終  
 り舊知事公の告諭書と是よ取り添へ傍よ  
 置き頃し四月十五日軒端の花の夕風に散る  
 と急ぐも我が友と静よ坐と一め十分よ腹搔  
 切て死したるの適れありし最期よあをあり



つるるり

亦熊本縣の郷士にてさる者ありと知られたる宮崎八郎ハ八代にて戦死せしとのと又回然るべき官員もて熊本へ歸て其内は彼騒ぎあり同縣の人小生擒れしか又薩州人の為は助けられて去る九日は東京へ歸られたりと敵ハ廿七日より廿九日迄縣下は潜を御船大戦ハ以来ハ各口は戦ひるく唯人言と固守して廿九日より官軍都の城并は大口

筋へ軍を進め同廿日み佐敷町より或所へ書を送

し四月初頃西郷大將ハ春日村二本木村の間は住居して病院を川尻より過三日は御船は移し本陣を木山は轉し又高千穂の両所より諸方へ出陣ありしと云ふ

是より大分縣下大激戦続て甲突川進撃ありつる記々第十二編へ記載すべし

西南太平記十一編卷之下終



西南女子學

明治十年五月一日 御届

全 十年六月十五日 出版

東京堀江町二丁目二番地

安達平七止宿

茨城縣平民

編輯兼 出板人 沼尻 絳一郎

東京書林 賣捌人 江島喜兵衛

定價廿三錢五厘

萬笈閣製本專賣書屋

東京

須原屋茂兵衛  
山城屋佐兵衛  
和泉屋市兵衛  
三家村佐兵衛  
須原屋伊兵衛  
和泉屋金右衛門  
出雲寺萬次郎  
陶田屋嘉七  
須原屋新兵衛  
和泉屋吉兵衛  
須原屋佐助  
丸屋善七  
藤岡屋慶次郎  
山口屋藤兵衛

東京

森屋治兵衛  
雁金屋清吉  
和泉屋勘右衛門  
山城屋政吉  
村上出店  
内藤支店  
紀伊國屋源兵衛  
紀伊國屋梅次郎  
大坂屋藤助  
袋屋龜次郎  
河内屋文助  
東圓作  
米谷助右衛門  
豐後佐伯  
周防岩園







同 仙臺	同 偏島	岩代若松	同	野州宇都宮	同 佐原	下総野田	同	武州深谷	同 笠松	濃州大垣	同 上田	同 小諸	信州長野	五州三島	
菅原屋安兵衛	上野屋彦太郎	龍田屋萬助	同	藤物屋伊右衛門	萬平屋忠兵衛	正文堂利兵衛	梅屋林藏	小野倫三	酒井省吾	玉井忠藏	平野利兵衛	鼠屋甲造	相場七左衛門	小掛屋喜太郎	關谷利右衛門
陸前仙臺	同 谷地	同	羽前丸形	長州萩	備州岡山	越中福光	同	同	同	越後四谷濱村	同	同	越中富山	同 山田	
伊勢屋安右衛門	田宮五郎	市村屋五郎兵衛	北國屋彌平治	山城屋彦八	中島屋益太郎	清水清左衛門	三條屋七十郎	上田屋治八	中村屋作平	佐藤友吉	上市屋宇三郎	古川屋吉兵衛	中村屋甚吾	藤原屋長平	

010190507713



